



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL：06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail：daimao@travelmitra.jp)

## 「道を歩く人がやってきた」④

旧統一教会問題に関連して、最近よく取り上げられるのが宗教2世の問題である。親がどのような信仰をもとうが親の自由、親の勝手だが、それに無意識下で影響されるのが彼らの子どもたちである。なにしろ親は自分だけが正しい〈道〉を歩んでいると思い、それを子に教えて何がいけないのだ、と思い込んでいる。

教理によると、人間は人類の始祖アダムとイヴが犯した〈原罪〉というものを背負っている。それ故、それを自覚し悔い改めよ、とわが子にいう。ところが「罪」とは何か、「自覚」とは何かを考えることがないので、ただただ「悔い改めよ！」と強要することになる。

最近目にしたインドの逸話を紹介しておこう。

ある村に聖典の教えを堅持する聖者がいて、人々に教えを説いていた。その村には、性悪、不義の女がいた。「そんな悪いことをしていたら地獄に墮ちるぞ」と聖者は何度も注意した。ところが、身分が低く、貧しく、生きる術をもたない女は、性根を変えることができなかった。しかし、女は聖者のことばに怯えて、「神さま、自分ではどうすることもできません」と許しを請うた。

この女の臨終に、神さまは魂を天国に持ち去った。ところが聖者の魂は、悪魔が地獄に持ち去ったのである。彼女は神さまを見ていたが、聖者は彼女の〈罪〉ばかりを見ていたからである。

女の悪行の善果、聖者の善行の悪果、この逆転の因果は一考に値する。

この逸話を読むと、親が聖者のように思える。恋愛感情禁止、儒教的道徳観の押し付け、信者間の養子縁組、合同結婚式、多額の献金など、子に自由意志と人権はない。

この2世問題にからんで、最近「エホバの証人」の記事がよく取り上げられる。

アダムとイヴは、天使サタン（神への反逆者）の誘惑に負けたために、永遠に生きる権利を失った。サタンが支配する人間世界に終焉（ハルマゲドン）がくるとき、神の軍団がやってきてサタンに勝利して、この世はパラダイスになると言う。教えの根幹は「神の王国」を回復することである。

ときどき、わが家の玄関に物静かで品性のあるご婦人が訪れ機関誌をおいて去っていく。ご近所は仏教系新宗教の会員なので頭から拒否するが、わが輩は優しいので丁寧に機関誌を受け取って「ご苦労様」と声をかける。

わが輩の単純な理解では、すでにハルマゲドンは始まっている。そのことに気付いてほし

い。訪問すべきは、わが家でなく、ロシア大使館ではないのか。「ウクライナを侵略するな」「核兵器を使用するな」「戦争反対！」を大使館の玄関先で叫んでほしい。

遠い未来に起こるかどうかわからない神話的ハルマゲドンより、現実のハルマゲドンに注視してほしいものである。

実はわが輩は「エホバの証人」に、旧統一教会ほどの悪い印象をもっていない。

最初にインドを放浪したとき、精神的ダメージを受けた。そのときに寄り添ってくれたのがインドの「エホバの証人」の家族であったからである。

英語の勉強になるからと、「Watch Tower」（ものみの塔）などの機関誌をくれた。勧誘や洗脳のたぐいではなかった。

身近に二人の信者がいる。一人は小学校の同級生SHO君、大学の美術研究会の一年先輩のSGちゃんである。SHO君は活発でわが輩よりも成績が良かった。最初のインドから帰ったとき、自宅に同級生を集めてインド風カレーを振舞った。彼は在日二世で、大陸的気質に誇りをもっていた。日本人にはない、鷹揚で型にはまらない気質について朝まで語り合った。

そのSHO君が、数十年後にわがミトラ城の扉を突然開けて入ってきた。戸別訪問の布教であった。まさか、あの大魔王がいるとは思わなかったであろう。わが輩も驚いたが、“突然”を驚いたのではない。牙のないSHO君、型にはまったSHO君を見たからである。あの「物静かで品性のあるご婦人」と何ら変わらなかつた。わが輩に会うのが恥ずかしくなつたのか、やっ来てなくなつた。数年後に、ご婦人にSHO君の消息を訊ねたとき、早逝したと聞いた。教義に則つて輸血拒否したのか、などとは聞かなくつた。

SGちゃんが、われら研究会の飲み会にやつてきた。彼女の画風は、かなり個性的であつたのを記憶している。日光の湯ノ湖に写生合宿に行つたとき、彼女は山を見ながら、人物を描いてた。その彼女とは卒業以来会つたことがなかつた。つもる話はいくらでもあつた。わが輩がインドの家族の話をする、SGちゃんの相好が崩れた。「私を理解してくれる人が現れた」と思つたのであろう。後日、わざわざ写真集を送つてくれた。わが輩には、昔のSGちゃんと変わらぬ可愛い先輩に思えた。

ところが幹事役が彼女の信仰を否定、いやバカにし始めた。それで消息が途絶えてしまつた。直截的な信仰の否定が“拒絶”をもたらした。

前述の二人とインドの家族は、同じ「エホバの証人」ながら、両者には微妙な差異があるように思えてならない。輸血拒否は共通しているが、布教のための戸別訪問は見られない。それはカースト制度と関連がある。日本の宗教は「ちゃんぷる」だから改宗の可能性があるが、インドはカースト的に固定化されているといつてよい。戸別訪問しても相手にされない。だから日本の「エホバの証人」に比べて、わが輩にはゆるやかに感じられた。

大陸的に大雑把で、ゆるやかな「道」でも良かったのに、あんなにガチガチ歩き回つて、わが旧友SHO君は天国に赴けたらうか。